なつかしい質感を探して　　名久井直子

昔の印刷物には、不思議な味わいがあった。
ちょっとしたズレや色の偏りから生じる可愛らしさ。
インキのカスレやエッジのブレが見せるやさしげな表情。
印刷の柔らかな一面を、「オフセット・ステンシル」と「なつかし印刷」で引き出した。

ABOUT TRIAL
トライアルについて

●印刷について

初めての印刷体験は中学生の時に買った“プリントゴッコ”（家庭用小型印刷器具）でした。雑誌で知った4色分解を実践しようと、文房具店やコンビニのコピー機を駆使して原稿をつくり、4色フルカラー印刷に挑戦。毎月のように絵本や絵葉書をつくっていました。

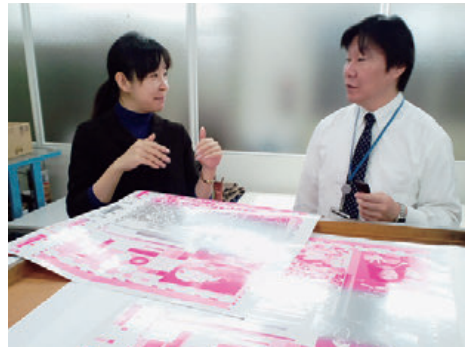
それ以来、思いを届けることができる印刷が大好きです。そんななかで、時々、昔の絵本の復刻や、昔の絵を使いながら本の仕事をすることがあります。でも、今の印刷だとどうしても色味がきれいになり過ぎて、ペラッとした印象になり可愛さが半減してしまうのを、とても残念に思っていました。

今の印刷はとても精度もよくて、それはそれですごくいいことだし嬉しいことですが、逆に印刷することによってプラスされていた可愛さの要素がなくなってしまった気がします。例えば、すごくカッチリしている人が、ピンクのハンカチを使っていると気づいた時に「かわいい！」と思ってしまう、そんな感覚。隠れている部分に見え隠れするちょっとブレた部分って、すごく可愛い。印刷でいえば、版ズレでポワッとモアレが起きているような感じです。

そんな可愛さに繋がっていたブレの部分を、今のオフセット印刷でつくるにはどうしたらいいかを考えてみることにしました。たとえば印刷時に圧力の掛け方をちょっと弱くするだけで、ホワッと柔らかな面をつくることができます。インキの量を加減すれば、また違う表情が生まれます。プリンターにはないアナログ的な楽しさ、それを引き出してみることにしました。

●制作コンセプト

コンセプトは「なつかしい質感」です。オフセット印刷と言えば、写真もキレイに再現できて正確無比な印刷方式だというイメージが強いけれど、その裏に隠れたアナログな部分を引き出してみたいと思いました。



どこかなつかしくて、可愛らしい、ちょっとレトロな雰囲気をつくりたいという感じです。

一つ目のトライアルは「オフセット・ステンシル」。トライアルに際して、まずは使用する印刷機を見てみたいと工場見学に行った時にひらめいたアイデアです。印刷機をじっと見つめていたら、そのシンプルな構造から「印刷はハンコなんだな」とあらためて感じました。見た目には大きくて正確でまさに機械という姿をしていますが、実はとても人間っぽくて、すこし可愛い部分があるものに思えてきたのです。そこで、プリントゴッコやガリ版刷りのようなアナログ的な要素として紙の型を間に挟み込み、オフセット印刷に隠された柔らかな部分を引き出してみました。

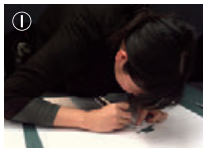
もう一つのトライアルは「なつかし印刷」。昔の絵本のような雰囲気を自動的に作り出せるようなレシピに挑戦です。もちろん今のCMYKのインキセットは、再現性という方向から見ればベストとされている色ですが、なつかしい質感を出す事をコンセプトにしたら、またきっと違うベストなインキセットができるような気がします。製版も用紙も同じように「なつかしい質感」のためのセットがあるかもしれませんね。

―― 名久井直子

型紙で刷る「オフセット・ステンシル」

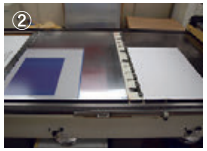
「版についたインキがブランケットに転写され、そこから紙に印刷されるというオフセット印刷の仕組みが、シンプルに機能するオフセット1色校正機。型紙を、印刷される紙の上に重ねて刷ったら、紙への圧力が変化して面白い効果が出るのではないかと考えたんです。ふだんは刷られるのが役割の紙に、版（型紙）としての仕事も担わせたいというヒラメキから生まれた、名付けて「オフセット・ステンシル」。どんな仕上がりになるのか、自分でも想像できませんでしたが、思った以上に楽しいものになりました」

オフセット・ステンシルの印刷方法



原画を描き型紙を切る：配色を決め、色ごとに原画を描き、その台紙を切り抜く

▼



刷版を用意する：印刷のための刷版（ベタや平網）を用意する（左が刷版、右が用紙）

▼

用紙の上に型紙を重ねる：印刷機上に用紙と型紙を重ねて置く

▼

型紙の上から刷る：版からブランケットに転写されたインキが、型紙と紙に付着する

▼

型紙を外す：切り抜かれた部分からインキが用紙に付着しているのがわかる

▼

完成：色数分この作業を繰り返す

※このテストでは手で型紙を切り抜いたが、切り抜く版の数を考慮し、最終作品ではカッティングプロッター*を使用した

型紙

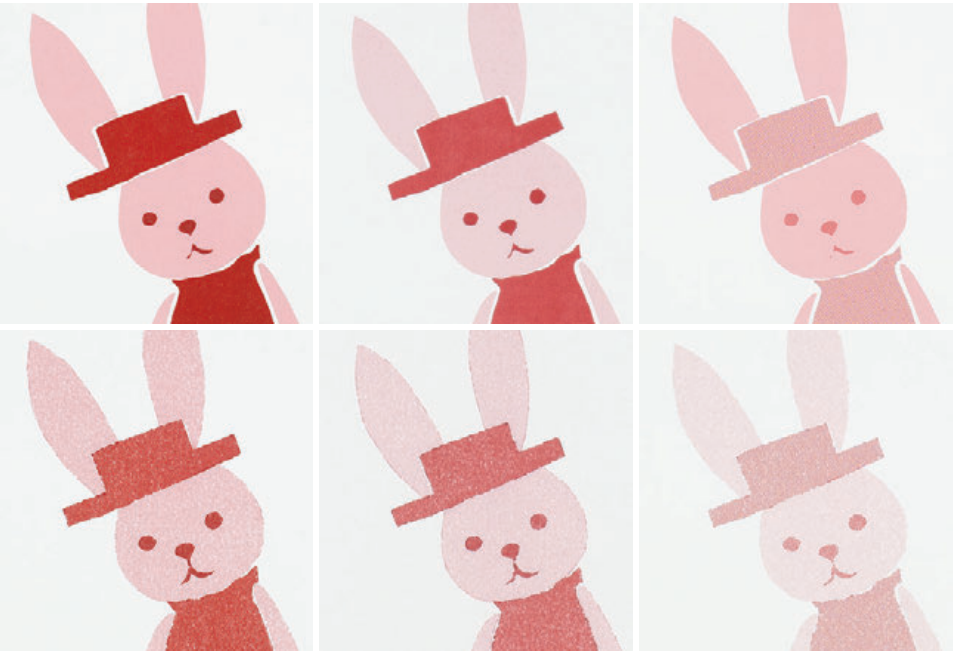
上下共：右頁の刷りで使用した型紙

＊自動的に任意の形状に切り抜く機械

型紙を使用した印刷の特徴

左頁の型紙を使用した刷り上がり。型紙を挟んでインキがブランケットから用紙に付着する際に、型紙の厚みが二つの影響を及ぼしている。一つは、インキが紙に十分に圧着できないことで強調された用紙の質感。もう一つは、インキ溜りが発生したことによる、曖昧なエッジ。どちらも通常のオフセット印刷では見られないテクスチャーだ。特色2色刷り。

刷版：ベタ版／刷り順：薄ピンク→濃ピンク／用紙：左＝ダイヤプレミアグロスアート、右＝OKアドニスラフW



上段：刷版：左より、ベタ版、60％網版（175線）、60％網版（47線）／刷り順：薄ピンク→濃ピンク／用紙：ダイヤプレミアグロスアート
下段：刷版と刷り順は上段と共通／用紙：OKアドニスラフW

昔の絵本のような「なつかし印刷」

「大正・昭和初期の絵本には、今の印刷物にはない独特の味わいがあります。たぶん製版も紙もインキも今とは違っていたのだと思いますが、あの粗さや版ズレや、強い発色と濁った色のなんともいえないバランスにとても惹かれます。なんとか昔のような印刷表現を今やってみたい。そんな思いから、現在のオフセット印刷で昔なつかしいレトロな雰囲気を再現するトライアルをしました。製版、線数、インキ、刷り方などいろいろアプローチしながら、“こうやればできるよ”という方式を組み立てました」

原画

イラストレーターの布川愛子さんが描き起こしたイラストを原画として実験に臨んだ。繊細なタッチと豊かな色彩が魅力（左が全体像）。

版ズレ・モアレ・背景色

印刷の精度が低いと版ズレやモアレが起き、結果として微妙な色調とラフなエッジが生まれる。また、昔のように質が悪い紙の場合は、用紙自身の色味が刷り色に影響してくる。この実験では、モニター上の画像で各版を操作して版ズレを起こした。また、4色分解して網点の状態にした原画を出力し、それを再度スキャニングして4色分解することで網点をダブらせてモアレを起こした。加えて薄い背景色を全面に引いたものも作成した。インキはプロセス4色、用紙はOKアドニスラフWを使用した。

上左：4色分解した原画をそのまま印刷
上右：版ズレ加工を施して印刷
下左：版ズレ、モアレ加工を施して印刷
下右：版ズレ、モアレ、背景色を加工して印刷

フィルム出力による製版と古紙再生紙

次に試みたのが、フィルム出力による製版。現在はデータから直接刷版に出力するが、10数年までは中心的に用いられていた方法。当時の製版方法に近づけるために、この方法を採用した。用紙は、コミック誌などに用いられる古紙再生紙などを、インキはプロセス4色を使用した。

上左：粗い線数とフィルムならではのやわらかさが相乗効果を生んだ。用紙：OKアドニスラフW
上右：濁りの強い用紙の色が影響し、全体的に沈んだ色調になっている。用紙：せんか紙（古紙再生紙）
下左右：用紙の個性が強すぎて、原画の風合いが消されてしまった。用紙：せんか紙（着色した古紙再生紙）

インキセットの検証

さらに、いろいろなインキセットを試した。4色分解した版を、それぞれ違う設定によるインキで印刷し、効果のほどを確認した。通常のレギュラーインキのほかに、色域が広い広演色インキkaleido＊と、PANTONEのプロセス4色をメジウムで希釈したもの、昔の印刷物を検証しながら調合したオリジナルの特色で実験。用紙はOKアドニスラフWを使用した。

上左：【レギュラーインキ】
上右：【kaleido】紫系の発色が特徴的だが、目指すイメージとは若干ズレがあった
下左：【PANTONE】軽い色調が特徴のインキセットだが、大きな効果は得られなかった
下右：【オリジナルインキセット】スミやシアンはかなりイメージに近かった。黄とマゼンタのバランスが課題となった

＊従来のプロセス4色印刷では再現しきれなかったRGB画像の広い色領域を、通常の6色、7色印刷に近いレベルで再現可能とした4色プロセスインキ

FINISH
全作品とディテール

Art Direction & Design : 名久井直子 / Illustration : 布川愛子

用紙：OKアドニスラフ70　四六判 59.5kg
版の構成：PANTONE 466 U→PANTONE 7468 U→スーパーシルバー（2版）→PANTONE 1795 U→PANTONE 419 U→PANTONE 419 U→ブラック

用紙：OKアドニスラフW　四六判 65.5kg
版の構成：特色ブラック→特色シアン→特色マゼンタ→特色イエロー→ブラック

用紙：OKアドニスラフW　四六判 65.5kg
版の構成：DIC G-258→DIC 419→PANTONE 190 U→PANTONE 336 U→ブラック→LR輝ゴールド→ブラック

用紙：OKアドニスラフW　四六判 65.5kg
版の構成：特色ブラック→特色シアン→特色マゼンタ→特色イエロー→ブラック

用紙：印刷せんか紙 / Nラフ白　四六判 42kg
版の構成：PANTONE 403 U→PANTONE 1788 U→ブラック（2版）
※展示作品は仕様が異なる場合があります

AFTER TRIAL
トライアルを終えて

●トライアルを終えて

二つの方向で進めたトライアルでは、二つの異なる面白さと楽しさを思う存分味わいました。

「オフセット・ステンシル」はとにかく楽しかったの一言に尽きます。トライアルでは自分の手で型紙を切り抜き、そのまま用紙の上に置いて刷り、破けるとテープで補修してまた刷っていました。そうするうちにだんだんと型紙として適した形も余白の取り方もわかってきて、耐久性も向上させることができました。

それにしても紙1枚の厚さが印圧に影響して、こんなフワッとポソポソした質感になるなんて想像していませんでした。でもあまり応用が効かない方法なので、たぶんもう一生できないかもしれませんね。

逆に「なつかし印刷」は、仕事でもある程度応用できるものにしようと考えながら進めたので、ポイントごとにスパッと取捨選択をしながら積み重ね、絞り込んでいけたトライアルになりました。

例えば、インキはこのために設計したオリジナルのセットです。シアンは黄色味が強い緑がかったものにして、イエローとマゼンタには蛍光インキを加えて彩度を高めました。何度も校正を出しながら少しずつ改良を加えたなかで痛感したのは、プロセス4色に手を加えるということは本当に難しいということでした。インキセットに手を加えるたびに、表現できない色域が発生したりいろいろなことが起こるので、毎回フィードバックして製版をやり直したりしました。

他にも、一度出力した版を再度スキャニングして規則性のない自然なモアレを発生させるなど、PD田中さんと共にいろいろな方法で「なつかし印刷」をつくりあげています。いつもは原画をいかにきれいに再現するか、ということに傾注することがほとんどなので、今回のように、むしろ原画と離れていく方向でつくりあげていくのは、めずらしい作業でした。

―― 名久井直子

●プリンティングディレクターから

アナログからデジタルへと、製版・印刷はこの何年かでも大きく変化しました。画像再現の質が格段に向上し、印刷機、用紙、インキ等もそれに見合うレベルアップを遂げています。「なつかし印刷」では、さらに時代をさかのぼり、今では味と思える微妙な版ズレや網点の粗さ、インキの着肉ムラや発色の鈍さなど、当時の技術の限界であろうこの部分を、いかに今の4色印刷で再現させるかが重要なテーマになりました。過去の印刷物を参考にしながら自然な版ズレをつくる方法を探したり、インキの色相をいじってみたり、材料と製版からアプローチを重ね、組み合わせています。

一方、「オフセット・ステンシル」では、印刷の知識や技術で名久井さんのアイデアをどうサポートできるかを第一に取り組みました。型紙を重ねて刷るという発想には驚きましたが、大変楽しい経験になりました。

実は名久井さんとは初対面。終盤になってようやくそのイメージや感覚を少しは汲み取れるようになったように思います。繊細で大胆、譲れない部分は徹底的に追求し、取捨選択する時は柔軟に対応する、その決断力と判断に随分と助けられました。

―― 田中一也